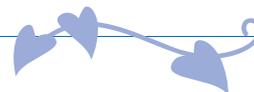


## 第2章 まちづくりの基本理念と都市像



### 福生らしさ

愛着が持たれるまちには、個性があります。福生市には、多摩川、玉川上水、段丘崖線の緑地など、やすらぎと潤いをもたらす自然的要素があります。福生不動尊遺跡や長沢遺跡から出土した遺物や集落跡からは、縄文時代早期にあたる約1万年前に人間の活動が展開されており、縄文時代中期にあたる約5千年から4千年前には、大規模な集落を形成し、生活が営まれていたことが推定されます。「福生」という文字が初めて歴史に登場したのは11世紀後半で、16世紀には「福生郷」と称していました。19世紀には造り酒屋をはじめとする産業が生まれ、その後周辺地域の商業の中心として発展してきたという、他の地域にはない特色があります。

福生市が持つ個性、独自性、地域性に磨きをかけ、次代に伝えるために、都市を構成する3つの要素である「ひと」、「まち」、「くらし」それぞれに福生市ならではの特色を求め、そこに生活し、そこで交流する市民の視点に立った「ひと」、「まち」、「くらし」づくりに努め、魅力あふれ、誇りの持てる、愛着のあるまちづくりを進めます。

### 市民とともに

地方分権の推進により、自治体は自主性・自立性がより一層求められています。また、市民のまちづくりに対する要望は個別化、多様化しています。変化が早く複雑化する時代環境の中で、福生市のまちづくりは、市民と行政との強い連携のもと、迅速に進めていく必要があります。

多くの市民がまちづくりに積極的に参加し、まちづくりのすべての段階で市民と行政が役割を分担し、それぞれの責任を果たし、市民が主役の考えのもと、まちづくりを進めます。

### 目指すべきまちの都市像

福生市は、多くの人たちの努力により発展を続けてきました。また、自然、歴史、文化、産業など、かけがえのない財産がたくさんあります。これらの資源の活用を図り、福生らしい個性と魅力、にぎわいと活気を生み出し、すべての市民が心から「住んでよかった」、「住み続けたい」と思えるよう、

『このまちが好き 夢かなうまち 福生』

を目指すべきまちの都市像とします。